

大海原への夢

中村正男

怪なき森林に歓楽がある。

荒涼たる海辺に法悦がある。

大海原の深淵に侵入者を入れぬ

至醇なる団欒がある —バイアロン—

この詩のように、大昔の人々にとって海に対する夢、あこがれ、母にも似た包容力のある魅力は大きなものであった。今だに神秘のベールがかぶされたままである。大阪湾や東京湾のように現代日本産業の象徴かの様に、公害のために汚された海も存在するが、地球上の約70パーセントを占める海にとってはとるにたらない事である。

現代20世紀後半における時点において、いま海底にかけられている未知に対する探究の夢は大きく数多い、アトランティス・ムーなどの失なわれた大陸、それはいまからほぼ1万2000年前に、1日と悲惨な一夜で、大西洋に没し去ったと……ギリシャの哲人プラトンが書きしるした謎の大陸である。後者の方も同様にインドの教典の一部にしるされた幻の大陸で、太平洋にあったと伝えられている。これを確かめようとする人々や、もっと現実的に海底に眠っている宝庫を開こうと夢みる人々もいる。

最近になって海底の宝庫を人類のために開発しなければならない資源地帯であることが、明らかになってきた。海底油田、海底炭田、ガス田など例としては、アラビア、ベネズエラ、メキシコ湾の海底油田は実現されていることである。ある所では、海水から真水を取り出すことを行なってい

る。しかし経費の為にはもっと安価に大量にできるようにならなければ、現実的ではない、これが実現できれば農業においては雨の心配はしなくてもよくなるだろう。インドなどのように超増大してきている人口国の食糧キキンは、助かるだろう。また地球全体の耕作面積も何割かアップするだろう。その他では海水からナトリウムや命などを作り出そうと研究されている。このようにこれらの未来の夢は、限りなく広がっている大陸棚を耕作して、海底の農業などや、魚の養殖の実現のために研究されている。これらの夢を実現するためには人間が海底の作業を可能にされねばならないというわけで、フランスのクストー（モノコ海洋博物館長）等や、東京医科歯科大学等において、海底において人間にかかってくる重気圧の下での人間の生理学の面から研究して、海底での作業がどのように人間の体に影響をおよぼすかを研究している。

これらが実現されれば、スモッグで住みにくくなった陸上を逃げだして、人間は海中の家に住むかもしれない。種々雑多の美しい魚が泳ぎ回り、まるで竜宮城を思い出すかもしれない。現代の科学のテンポではこうなるのは時間の問題だろう。あと半世紀もたたないうちに実現の可能性があるように私は考える。

こうゆう方向へ進んで行くのも面白いが、我が探検部においては、私はこう提案したい。謎の大陸を解明しようということである。海底探検しか

り、地底探検しかり、探検部の全てのテクニク
で以って、探検しようというのである。バカバカ
しく思う者もいるかもしれないが、漠然とした夢、
あこがれとして考えてもらってもよい。

しかし先にあげた謎の大陸アトランティスの実
存性に関する論議が、2千年にわたってくりかえ
されてきた。それは夢の大陸のお伽話である。そ
こにはさまざまな果樹や香料が満ち満ちていて、
金の次に大事にされたオリハルコンという金属が
採掘されていた。またそこには王の住む首都があ
って、ポセイダンの神殿を中心に、さまざまな神
殿と宮殿がたち並び、民家が密集して巨大な都
市をなしていた。このような都市の周辺には豊か
な農村がひろがり、強力な古代国家が存在してい
た。そのアトランティスが、突然海のなかに沈ん
で、現在は影もかたちもないというのである。一
見日本人が考えれば、荒唐無稽なお伽話がヨーロ
ッパ世界で、なぜはでしない論争をくりかえして
きたかというのは、第一に、プラトンによるとア
トランティス文化はヨーロッパ文化の源流をなし
エジプトとギリシャの文明にさきだつものと考え
られていることである。第二には、アトランティ
スが一種のユートピア的な性格を持っているから
である。二つともヨーロッパ民族にとっては、自
分の担っている文化そのものはじまりに興味を
もつことは当然であろうし、又、とくに中世の夢
のない希望のゆきつまった世界にあっては、それ
は暗い壁の彼方の太陽の照る世界として彼らの憧
れとなった事実もあるだろう。

現在の発達した海洋学により、大西洋の海底の
状態があきらかになるにつれて、アゾレス群島を
中心とする大陸の存在性を主張する学者もあらわ
れた。又その沈下が、プラトンののべるように、
いまから1万2千年前頃でもおこりえた現象だと
説明されるにおよんでアトランティス問題は、夢

のすくなくなった世界に、新しい夢をつくりはじ
めた。又井尻正二氏らの説くところによれば、日
本列島や日本海の成立さえ、この年代に関係して
いることがたしかめられつつある。このお伽話の
可能性の問題であるが、例としてあげると、ドイ
ツのアマチュアの考古学者であってハインリッヒ・
シュリーマンのエーゲ文明の発見である。シュリ
ーマンの発見した文明が発見されるまでは、まっ
たくの伝説にすぎなかったということである。それ
はホメロスの「イリアス」の事である。彼が生
存した十九世紀の終わり頃には「イリアス」は詩
的虚構であり、民衆の空想にすぎないと考えられ
ていた。遠い昔の芸術作品として、古代文化の文
学的記念碑として、現実にあった過去の歴史的事
件が描かれているということ、誰一人認めよう
とはしなかった。

しかしシュリーマンは、少年時代、父から贈ら
れた、子どものための世界史を読んで感嘆し、伝
説上の世界史を自分一人で信じ切ってしまった。
そして確信をもってトロイ、黄金満つるミュケ
ナイ、ティリマスを発掘したのである。それは彼が
子供の頃読んだ「イリアス」の詩以上にあらゆる
ものが期待を上回るものであった。この事からし
てアトランティスにも可能性を求めようとする
のである。アトランティスの場合は、プラトンの
「クリティアス」と「ティマイオス」という彼が
エジプト、イタリア、シチリアを放浪した見聞録
である。プラトンはアトランティスの事を祖父の
クリティアスから聞き、それをクリティアスへ伝
えたのは「七賢人」の一人ソロンであり、ソロン
はサイスというナイルの三角州にある古代都市で
エジプトの神官から聞いたのである。トロイの場
合は一つ「イリアス」だけがたよりであったが、
アトランティスの場合は先にあげたエジプトの他
にスペインのコルテスが征服したメキシコのアス

テカ王国の伝説である。最初コルテスが、ベラクルスから上陸してアステカ王国を発見した時はあまりにもブラトンの伝説の都市ボセイドニスと似ていたのでアトランティスを発見したと思ったのであったが、アステカの話によればアステカの伝説では我々は海上の島アトランから舟にのって対岸に渡ったという。そしてアメリカ大陸はアトランティスの悲惨な破局ののちに生き残ったアトランティスの助った国であるというのである。その頃は丁度コロンブスがアメリカを発見して彼自身はインドと思ひこみ、ヨーロッパ大衆の考えはアトランティック・オーシャンの向こうにある夢の大陸アトランティスと、アメリカを思っていたのであるが、これで考えは変ってしまったのである。

なぜアトランティスの謎を求めて、くだらないことを書くのだらうと思うかもしれないが、探検

部において大きな夢、そしてあらゆる各パートの活動においても関連性がでてくるものだと考えるのである。探検部員一人一人が調査探検を行う場合、大局的に歴史的に物事を考えながら進めていく事は、有意義であり面白くなっていくと思う。一つの民族を調べるので民族の流れなどを関連して調査すると一大発見をするかもしれない。洞突で大昔の獣の骨を発見するのもしかり、海で見つけて関連づけていくとなにかを発見するかもしれない。それらによって、イースター島の臣石やイギリスのドルメン、インカ文明等の関連性が発見されるかもしれない。百年後、いや2、30年後には潜水艇を使って大海原の深海でアトランティスを発見しているかもしれない。

なかむら・まさお（経済学部学生）

